

コンテンツ・ベースの英語授業での「ジェンダー」教育の課題

——受講生のフィード・バックを中心に——

飯田 深雪

藤女子大学人間生活学部

1. はじめに

本節は、近年、英語教育の分野でも様々な大学で、コンテンツ・ベースのジェンダー研究が取り上げられるようになったことを受けて(O'Maggio, 1986)、藤女子大学で行った授業の考察である。Dwight(1999)は、TESOL(Teaching English as a Second Language)の分野における、文化に関する内容の紹介の必要性について、「21世紀にはTESOLの分野で、異文化コミュニケーション、心理学、文化人類学、カルチャル・スタディーズの分野を扱うことが、アイデンティティや差異を学ぶために必須である。」(P.625)と指摘している。また、Spack(1997b)は、「学生をある文化のグループの一人としてではなく、個人としてみる必要があるので、文化はTESOLの中心的存在であるべきである」(P.772)としている。

最近の英語教育で取り入れている、「異文化コミュニケーション」の授業で「ジェンダーと文化」「ジェンダーとコミュニケーション」などのトピックがさまざまな大学で教えられるようになってきた。特に女子大では受講生のジェンダーに対する興味も高い。さらに、異文化の知識が必須であるTESOLの授業で、ジェンダー研究に関心を持ったTESOLの教員が調べて取り入れるという段階から、制度的に取り組み具体化していくステージに入ってきており(Atkinson, 1999)、ジェンダー教育のコアとなる「性別役割分業の見直し」を中心とした専門の教材も多く出版されている(国立婦人教育会館 女性学・ジェンダー研究会、1999)。

ここでは、今や大学の英語教育の一環としての「異文化コミュニケーション」の授業に欠かせない項目となった「ジェンダー」をテーマにした授業のあり方を、受講生の意識を中心に考察した。この授業は、「Gender, Culture, and Communication」というテーマで行った通年の授業の前期の受講生のフィード・バックとレポートを中心に受講生の学びの過程を分析し、その後、教員自身が授業を振り返り、「ジェンダー」をテーマとして教える英語授業の問題点、及び注意点を考察した。リサーチの方法については、ウヴェ・フリック(2004)『質的研究入門』の第5部「テキストから理論へ」(p. 208-295)を参考にした。

2. 先行研究

2.1 Dyer (2003) の考察

Dyer(2003)は、日本で英米の文学の教材を使って、英語で「ジェンダー」の授業をした。Dyerは、自身の授業の反省についての論文で、ブラジルの教育者、Fraire(1972)が、「異文化、多文化を扱うときには受講者のニーズが教員に伝わっていないことが多いので、教師と受講生がカリキュラムを共に作っていくことが必要である」と指摘していることを受けて、1) 受講者のニーズ分析 2) 受講者と教員のジャーナルの交換 3) そのクラスの持つ文化への配慮 4) 学生の持つトピックに関する既存知識の理解 5) フェミニストの知識を持っている女性教師の葛藤について考察した。

Dyerのクラスでは、教員にフェミニズムのステレオ・タイプの知識を植えつけられたと反抗したり、沈黙になったりして抵抗したものもいた。Dyerは、「ジェンダーのような受講者自身の価値観にかかわる問題を扱う場合は、教員からの一方方向ではなく、受講者が自身の言葉で話し、自分たちが学んでい

るトピックをコントロールすることが必要である。」と述べている。「そのために、教員は、受講者が授業内で「NO」といいやすい環境を作るべきで、すべてのクラス・セッションは実験的であり、受講者が授業の教師になり、自身の経験について語り、アイデンティティを発見していくことが真の受講者中心の授業である」と言っている。教員は、それにいくつかの質問を投げかけることで参加すべきであるという。(P.337)

2.2 近藤 (2003) の考察

また、近藤は、「ジェンダー・フリー」についての授業のあと、受講生のレポートを分析した結果、受講生は、自身のジェンダー・バイアスに気づいたものの、「文化的性差をなくすのは不可能に近い、どこまでがジェンダー差別で、どこまでがジェンダー差別でないかはっきりと線を引けない。」といている。また、ほかの受講者は、「ジェンダー《社会や文化の創る男女の性差》を学び、特に女性差別については敏感にはなったが、この考えは男女の違いを無視している」という。また、「この問題は決して答えが出ない」(P.38) という指摘もあった。

しかし、近藤は、それでもなおこうした問題を抱えつつもさらに「ジェンダー」について問うていくことが、「ジェンダー」をトピックとした授業には求められるのではないだろうか、と警笛を鳴らしている。

また、「ジェンダー研究を教育の場に取り入れることは、単純にフェミニスト・イデオロギーの注入といった、知識を伝達してすむ話ではなく、女、男、という性別によって固定化された生き方を問題としたり、それを支える文化や制度を問い直すなど、各人がどのような生き方をするのか、どのような社会の仕組みを作っていくのかといった、価値観を教育の課題とするきわめて実践的な活動になる」(P.40) とさきの Dyer と同じ指摘をしている。

3. 授業の概要と目的

3.1 授業の概要

この授業は英語の授業で、学科のコース目的はコンテンツ・ベースの英語 4 技能能力（リーディング、リスニング、スピーキング、ライティング）の上達、及びクリティカル・シンキング（批判力）をつけ、トピックを様々な角度から分析し、考察する能力を伸ばすことを目的とした授業である。授業は基本的に全て英語で行われたが、質問については日本語で受け答え、授業の後 5 分間は、その日の授業の概要を日本語で説明する場面もあった。この演習授業の受講者数は 35 名だった。

この授業における教員の目標は、「学生が社会のジェンダー役割を様々な視点から見て自己のジェンダー・アイデンティティを考える機会を持ち、英語で意見を発表し、自分の意見をまとめた短いレポートを書くことができるようにする」ことであった。

特に注意したことは、フェミニズムの知識をもつ教員が受講者にフェミニズムの知識を注入するこのであってはないという点であった。

3.2 授業の目的

英語で考える能力を習得するための授業であるので、授業の内容は、「Gender, Culture, and Communication」というコンテンツ・ベースの授業ではあるが、英語を使つてのコミュニケーション能力を養成するために、

- 1) 批判的思考のスキルを身につける
- 2) リサーチの仕方を学ぶ

- 3) グループ、および個人の英語プレゼンテーションの力をつける
- 4) 英語でエッセイを書く
- 5) 授業のあとにフィード・バックを書いて、自分の学んだ内容（コンテンツ）を確認することを授業のはじめに確認した。

教材は、*Gendered Lives* (Woods, 2001)、及び“Gender, Communication, and Culture” (Woods, 2002) から抜粋してリーディング教材として使用した。共に異文化コミュニケーションの分野でジェンダーに関する研究を行っている Julia Woods の著である。副教材は、雑誌の切り抜き、異文化コミュニケーションの教科書から *Identity* (Shaules, Tsujioka, & Iida, 2003) など、受講生がアクティビティーに使えるものを使用した。

4. シラバス

授業で扱ったトピック、また進め方は以下のようなものであった。

〈第1週〉社会や文化が作る性（ジェンダー）と生理的な性（セックス）の違い

読み物：“Social-symbolic construction of gender” “Feminine masculine communication culture”

〈第2週、第3週〉トピック① 「ジェンダー役割」

日本と比較して他の国ではどうか。家庭内、職場などにおいて違いはあるか。

読み物：“Communication constructs gender cultures”

〈第4週、第5週〉トピック② 「女性とメディア」

メディアはどう女性を描いているか。雑誌やテレビコマーシャルなどを分析。

この授業では、女性雑誌の切り抜きを使い、女性はどうあるべきか、男性はどうあるべきか、についてそれらの雑誌が求めている「女性らしさ」と「男性らしさ」を見つけてもらうアクティビティーをした。また、各グループで雑誌などメディアが求める女性像、男性像のステレオ・タイプについてリサーチを、グループ・プレゼンテーションを課題とした。

〈第6週、第7週〉中間テスト 「グループ・プレゼンテーション」(5 分間)

第1週から5週までに学んだことに関連したトピックについてのリサーチ

この課題の目的は、英語のプレゼンテーションであり、1週目には、プレゼンテーションの方法のビデオを使用し、プレゼンテーションに必要である、声の使いかた、ジェスチャーの使い方、説得力のある原稿の作り方などを学んだ。また、グループごとに、発表のアウトラインを提出した。(Appendix 1) プレゼンテーションは、1) 態度、2) 内容、3) 資料の効果 に分けて評価された。(Appendix 2)

〈第8週、第9週〉トピック③ 「ジェンダーと教育」

女性及び男性はどのようにジェンダー役割を学校や家庭で教えられているか。

読み物：“Psychodynamic influence of gender identity” “The games girls play and boys play”

〈第10週、第11週〉トピック④ 「ジェンダーと言語」

女性と男性の会話サンプルの分析 ジェンダー差はあるか、それはどうしてなのか。

読み物：“Differences between feminine and masculine communication culture”

〈期末課題〉前期に扱ったトピック、またはジェンダー役割に関する内容で自分の興味のあることにつ

いての英語小レポート。

5. プレゼンテーションのトピック

カテゴリーごとに分けると以下ようになった。

1) 結婚、家庭におけるの性役割

- ・ 結婚後の家事の分担について
- ・ 女性が仕事を選ぶという選択、夫婦共が働く家族は、他の国ではどう子育てをしているか
- ・ シングル・マザー、シングル・ファーザーの家庭について。

2) 「女らしさ」「男らしさ」について

- ・ 伝統的な男性の仕事への女性の進出—女性警察官、男性保育士などへの偏見。
- ・ 家庭で「女の子だから」「男の子だから」と言われて育ってきたことについて。

3) メディアが描く男性像と女性像について

- ・ 女性雑誌やテレビ・コマーシャルなどで描かれる女性—女性は何をやせたいと思うのか。
- ・ 男性に人気がある女性とは？ 雑誌を総合すると、料理ができて、かわいくて、甘えん坊
- ・ 報道に見る女性差別—長崎の女児殺害についての政治家の失言。田中議員を真紀子さんと呼ぶのはなぜか、女性キャリアは特別視される。
- ・ 最近のマンガでは女性の使う言葉は男性化してきている—マンガ、リボンマスコットコミックスの紹介。
- ・ 男性のファッションへの興味、男性ファッション雑誌の紹介。

4) 女性に対する暴力

- ・ 性的虐待についての新聞記事。

以上のように、トピックは、子育ての分担、女性の社会進出、男女のステレオ・タイプ、メディアの描く男性と女性などのトピックを扱い、授業で「社会が作る性役割」、「メディアとジェンダー」を学んだ後に、受講者がそれを身近なものから興味があるものを選んで発表をおこなった。後で述べる、学期末のフィード・バックでも多くの受講者が、自分の生活に関連したものからもっと学びたい、そのほうが楽しいとコメントしていた。

6. プレゼンテーション後の「ジェンダー」に対する意識のフィード・バック

フィード・バックは、受講生が書きやすいように日本語で行った。また、少しでも具体的に書いてもらうために、記述式にした。

1) ジェンダー差別や「男らしさ」や「女らしさ」への疑問、ジェンダー・フリー社会の実現を論じているもの 22名

- ・ 結婚観がだんだん変わってきた。結婚のよって男性に従属するのはいやだ。
- ・ 既存の性役割に疑問を持つ。
- ・ 社会のシステムが平等ではない。社会のシステムや法律を変えないと一人ひとりの意識では変えられない。
- ・ 身の回りにあるものの中に、いかに多くのジェンダースtereotypeがあるか気づいて驚いた。
- ・ 女はきれいで料理ができればいいというのはおかしい。もっと選択があつていい。もっとジェ

ンダー問題について知りたい。

- ・ 男女はメディアに振り回されている。
- ・ 男も女も家事をする能力があるのだから、男性も参加することが必要だ。
- ・ いかに性役割の概念と、ステレオ・タイプが家庭で育てられるか気づいた。
- ・ 日本社会は変わったといってもまだ男性中心。女性雑誌を見てもわかる。
- ・ 社会に差別があることは気づいたが、個人的には感じたことがない。

2) 性別役割分業の肯定、ジェンダー・フリー社会への疑問を論じているもの 4名

- ・ 男女に対する社会の観念はそれほど悪いと思わない。男はズボン、女はスカート、男は青、女は赤でいい。
- ・ 女性が洗濯洗剤や石鹸を買うのだから、それが、女性のためだけのようには宣伝されていても悪いと思わない。
- ・ 男も女も相手から好かれたいのだから、男らしく、または女らしくして、自分の魅力を磨けばいい。魅力的になることが大事。

3) どちらにも属さないもの 2名

- ・ 男だから、女だから、または、男女平等にすべき、などというのはどちらもおかしい、ユニバーサルに考えればそんな考えはいらない。
- ・ 男だとか、女だとかということに支配されず、人間としてのキャラクターに合った生き方を選ぶべきだ。
- ・ 社会が男女のステレオ・タイプを作っているのはわかるが、果たしてこれが変わるのだろうか。男女平等はいいけど、新聞で読んだが、ある学校が修学旅行で男女を同じ部屋にしたという話を聞いて、平等もどうかと思った。

「気づいた」「驚いた」「もっと知りたい」など、社会の中の「ジェンダー」についての考えのスキーマ（過去に得た経験）がなく、はじめて気づいたという学生が多い。

また、一般的に言われる「男らしさ」「女らしさ」について、「男らしく」または「女らしく」すれば異性に好かれる、という意見を持つ受講者がいた。このように「男らしさ」や「女らしさ」は社会や文化の中で作られる曖昧なもの、ということに気づいていない場合があった。また、女性（だけ）が洗濯洗剤を使うことに疑問を持つまでに至っていないケースもあった。

これらのケースは、「社会がジェンダー役割を作っている」という、「性別役割分業の見直し」の考えが理解できていないようだった。これは、英語での授業にもう少し日本語のインプットが必要だったことを示唆しているのかもしれない。

7. 学期末アンケート調査の結果

学期末アンケートは、質問項目を5つ作り、それに答えてもらった。内容をまとめると以下のようなった。

- 1) この授業の前にジェンダーについて学んだことがあったか？
初めて学んだ (24) 中学校、高校で学んだ (6)、大学で学んだ (1)
- 2) 授業はどうだったか？
面白かった (13) 役立った (14) 難しかった (6) 英語が難しかった (5)

海外の事情が知れてよかった (5) 女子大なので、意見が偏っている。もっと男性の意見も知りたい (1)

3) どのような方法を使った授業が効果的だったか?

プレゼンテーション (17) その理由—他の授業でしていないから、他の発表から学べるから、同じトピックの発表でも違う内容だから)

他に ディスカッション (1) 文献を読む (1) レポートの書き方 (1)

4) 授業を通して、ジェンダー役割についてどのような考えをもったか?

社会のジェンダー・フリーへ改革が必要 (20) 男女の役割はやはり別だと思う (5)

自分に偏見があったと気づいた (4) 差別はよくないが直せるのか疑問だ (2)

無理して変える必要はない (1) 既に平等になっている (1)

5) 今後、後期で学びたいことは何か?

「男らしさ、女らしさ」について (5) 性役割について (5) 諸外国の事情 (2)

メディアの描くジェンダー (3) 男女の会話分析 (3)

働く女性について (2) 主夫について (1) 過去との比較 (1)

8. 期末アンケートの分析

8.1. 分析

この結果を見ると、「面白かった」「役立った」など肯定的な受講者が 22 人で、約 70 パーセントいた。英語での授業なので、リーディングなど英語が難しかったといった受講者が 5 人いた。リーディングについては授業内で単語を確認しながら、学生とともに読んだが、1 年の英語には少し難しい内容があったかもしれない。

「授業はどうだったか?」の問いに対して、「女子大なので意見が偏っている」という指摘があったが、教員が女性であるため、クラスは全員女性であったので、他の大学の男子学生などの意見をもっと組み入れれば、授業内容に幅が出たのかもしれない。

また、受講者は、男女のコミュニケーションの違いなどについての英文の読み物や、教員がアレンジしたアクティビティーによって、ある程度「気づき」を得ているようだが、むしろ、自分たちがグループで自由に行ったプレゼンテーションを 1 番面白かったと書いている。ピア・ラーニング (学生同士で学ぶ) 方法をより好んでいるようだ。

4) の「ジェンダー役割に対してどのような考えを持ったか」の問いに対しては、「社会へのジェンダー・フリーへの改革が必要」(20 名) と多いが、学期を通して、ジェンダーについて話してきた結果、「男女の役割はやはり必要」、「差別はよくないが直せるか疑問」、「無理して変える必要はない」、などと否定的な意見の数もはじめのフィード・バックと比べて減ってはいなかった。

8.2 受講者が期末英語レポートに選んだトピック

“Marriage, men’s and women’s view of marriage”

“Men work and women keep house”

“Father’s housework”

“Which parents are more connected to children”

“Is warm color only women’s color?”

“Gender representation in the Cinderella story”
 “Men and women’s make up”
 “Femininity and masculinity that men and women think”
 “Young children and gender-biased environment”
 “The difference between boy’s and girl’s comic books”
 “Gender bias in the Japanese magazines”
 “Gender representation in media”
 “Gender in music profession”
 “Men’s magazines and women’s magazines”
 “How magazines represent gender?”
 “Act gender-free”
 “What is gender-free society?”
 “How men and women talk differently?”
 “Gender discrimination in the medical profession”
 “Selective dual-surname system in Japan”（英語のタイトルそのまま）

8.3 期末レポートの内容の抜粋 〈本文は英文〉

1) 男性と女性の職業、イメージとステレオ・タイプについて

「男性は強く、女性は優しく、というステレオ・タイプを押し付けられることが多いが、そうでない男性も女性もいる。大事なのは、伝統的な価値観であろうと、そうでなかろうと、いかに自分が感じるかであり、個人的なことだ。ジェンダー・フリーの社会にするためには、男性はどうだ、女性はどうだとかいう押し付けられた考えを捨てて、まったくのノーマルになることだ」

「男のほうが一般的に給料が高いから、夫が外で働いて疲れて仕事から帰ってくるのを料理や掃除をして待つのはいやではない。私は料理も掃除も好きだから。でも、それは当たり前のことと思われるのは困る。家事も子育ても夫も手伝うべきだ。それこそが結婚している夫婦であり、家族であると思う。」

「男性が化粧をするのはおかしいか？男性も女性も、きれいになりたければ、化粧をしていい。」

2) メディアが描く男性、女性について

「日本にはなぜ男性向けマンガと女性向けマンガがあるのか。男性のマンガは、アクション、スポーツ、ギャングなどの話がほとんどで、女性のマンガは、すべて恋愛物語である。男性は、自分がヒーローになってなにかを達成するストーリーで、女性は、ヒーローを待っているヒロインの心の中を描くことが中心で、そのうちに奇跡のようなものが起きて、ヒーローが現れる、というシンデレラ・ストーリーになっている。

しかし、インターネットで調べてわかったのは、男も女のマンガを読むし、女も男のマンガを読んでいる。男性は女性向けのマンガから、心の繊細な動きなどを学び、女性は男性向けのマンガから達成感を学ぶ。それなのに、男性向けと女性向けのマンガを分ける必要があるのか。」

「雑誌の中の女性と男性が変わってきている。男性雑誌も肌の手入れ、化粧、ダイエットなどを扱っている。しかし、サッカーなどのスポーツは男性の雑誌だけで、星占いなどの占いは女性の雑誌に多い。また、女性の雑誌は必ず甘いもののおいしい店の紹介や料理のページがある。少し驚いたことは、男性雑誌に、髪型など容姿を磨くことについての記事が多いことだ。「ビューティー」は、女性だけの言葉ではない。しかし、結論としては、雑誌に惑わされるべきではないと思う。女性でも女性雑誌を読まずに男性雑誌のスポーツばかり読んでスポーツが大好きな人もたくさんいる。」

3) ジェンダーと言語 (男性が会話をコントロールしている)

「どうして、日本では、女性は「お」などの接頭語をつけて丁寧に話し、おとこは「〇〇やったか？」というような命令形の話し方をするのか。このような命令形の話し方は、一般的には女性にはできない。いつも語尾に「〇〇ましょう」「〇〇ね。」などをつけなければならない。もしそうしないと、周りの人から批判されてしまう。私は女性だから女性言葉を使わなければならないことに抵抗がある。男性も女性もの同じ人間なのだから、人間としての言葉を使って、男性言葉も女性言葉もなくしたらどうなのか。」

「男性と話すときと女性と話すときと、自分は話し方を変えている。男性と話すときは気を使う。」

9. 学期末アンケートを基に問題点と注意点の分析

最初に述べたように、Fraire (1972) は、「授業は自由な場所であり教師は学生の学びにおける発見を共有するものである」と指摘している。受講者が教員の主観を押付けられたと感じていなかったか？自分の意見を自由に言える場所があったか？など、受講者のフィード・バックを読み、「ジェンダー」というトピックを教える難しさと反省点を痛感した。問題点をまとめると以下のようになる。

9.1 教員のフィード・バック

9.1.1. 〈受講者のスキーマに内容が合っていたか〉

受講者の持っている「ジェンダー」に対するスキーマは、アンケートによるとほとんどなかったが、そのような受講者に内容が理解できていたか？使用した英語教材や語句を本当に理解出来ていたか？受講生へのアンケートでは難しかったという答えが10名あった。受講者がプレゼンテーション、レポートに使用した書物、インターネット・サイトなどの資料は日本語にものがほとんどだった。しかし、このことは授業で身近に感じるトピックを扱うという意味で否定的なことではない。

9.1.2. 〈ニーズ分析はされていたか？〉

受講者の興味にあった授業が出来たか？ニーズ分析は授業前に出来ていたか？アンケートでは、もっと自分の生活に関連したトピックについて知りたかった、とあった。前期の授業では、受講者に比較的親しみやすい、「メディアの中のジェンダー表現」、「諸外国の事情」にとどめておいたほうがより深い内容のレポートが書けたかもしれない。授業前のより詳しい受講生へのアンケート調査が必要であった。

9.1.3. 〈日本の教室文化に配慮していたか？〉

「日本の授業は、伝統的にレクチャー方式であり、教員の知識を得ること目的とした授業構成であることから、受講者は教員に反論をしにくい…授業中学生は沈黙している。」(Caiger 1994, 16)という指摘があるが、受講者は教員に質問や反対意見を言えたか？教員と受講者に力関係はなかったか？

受講者が自分の経験を言う場面が少なかった。質問を投げかけても沈黙であることも多かった。また、プレゼンテーションやレポートについては、教師が授業に使った資料やその資料にいたものをプレゼンテーションやレポートに使ったものが多かった。個性のあるものやオリジナルなレポートや発表があまりなかった。学期の初めに、英語で、自身の経験を発表したり書いたりする練習がもう少し必要であった。授業で使わなかったものを書いたのは、3名で、それぞれ、「結婚後の夫婦別姓」、「医療の分野での男女不平等」、「音楽の分野での男女不平等」であった。

10. 結論とジェンダーを取り入れた英語授業の今後の課題

10.1 教員の反省点

受講生のニーズに合った学生中心のシラバスを作るためにはどうしたら良いのか？ジェンダーというトピックの紹介は、教員と受講生の細かいフィード・バックなしでは誤解が生まれやすい (Dyer, 2003)。学生が社会の伝統的な性役割を男女の性差と受け止めてしまうこともある。このような教員と学生の間にコミュニケーションの溝ができることを避けるために、以下のような点に注意する必要がある。

- 1) 学習者中心のシラバス — レクチャーではなく、学生が中心になり、学んだことについてディスカッションなどを通して考えをまとめていく。

アメリカのコミュニケーション学の Woods (2002) の論文および教科書 Woods (2000) を使用したが、文章で何かを「教える」より、ある「メッセージ」を与えて、受講者に考えてもらうほうがよいのではないかと。学生が自分の興味のあるものを持ち寄り、グループ・ディスカッションなどの題材にする。

- 2) 柔軟性 — シラバスは、授業が進むに連れて受講者の理解度、興味などを確認しながら見直し、変更する。教材も、分野に関連した教科書のような読み物を主教材しながらも、その都度、学生の視点に立った副教材を使う。

たとえば、授業のコンテンツ（内容）に誤解が生まれても教員がすべてを押し付けないほうがよいのではないかと。誤解については、後にクラスでディスカッションの場を作ればよい。

- 3) 力関係 — 教員と受講者に力関係が出来上がっていないか。教員が受講者と共に学ぶという立場を忘れていないか確認する。教員は受講者が反対意見などを言える場を作る。

「ジェンダー」という、トピックの性質上、教師と学生という関係を断ち切り、教員も自己の経験を話し共に学んでいく (Hooks, 1994)。

しかし、これには、大学 1 年の、社会とジェンダーの関係についてのスキーマがない学生がどれだけ積極的に参加できるかどうか疑問がある。少ないが、誘導ではない重要なインプットを受講者に入れることが重要であろう。それにより、受講者の個性やオリジナリティーを生かした英語発表やレポートを書くことができるようになるのではないかと。

10.2. 今後の課題

上の 1 から 3 の問題点を全て確認できていなかったという反省を踏まえて、より学生中心の授業にするために後期の授業の初めには以下の点を改良してみる。

学期の初め：学生のニーズ分析—ジェンダーについてどのようなことを学びたいか、ジェンダーと聞いて頭に浮かぶことは何か、など。

学期の途中：フィード・バック(ライティング) — 学生は授業中、口頭では反対意見などを言いにくいということを踏まえ、学生に授業内容、授業の進め方、英語の理解度についての疑問などをかいてもらい、それをもとに教員はシラバスの見直しを検討する。少人数の場合は、アンケートではなく、ジャーナルを交換してもよい。

後期の授業への発展：ディスカッション、ディベートなど、リサーチだけでなく「考える」機会を与え、自身のジェンダー問題についての理解をさらに深めながら、英語プレゼンテーション能力とライティング能力をさらに伸ばしていく。

文化を TEOSL の授業に取り入れる方法として、社会認知の立場から、Strauss and Quinn(1997)は、複雑な文化の問題を紹介するとき、「抽象的な考えを紹介するのではなく、学生が毎日を過ごしている日常生活の中に、学生が物事を過去の経験と関連させる Schema{スキーマ}があり、そこで文化についてはなすことができる。」(P.7) また、Gee(1992)は、「初心者とは、存在している町や、社会の中で “ACT”{行

動}することで学んでいく…」(P.12)と言っている。つまり、過去に学んだ経験と関連させることによって新しいことを学んでいくという。

ESL 教師であり言語学者でもある Atkinson (1999) は、ESL における文化の学習において、「特別な理論や定義を紹介するのではなく、それは、広い社会や世界の中で、何かまったく新しい、自分とは関係のない特定の人だけに起きていることではないのだ、ということを紹介していくべきである」(P.649)と言っている。

21 世紀の英語教育の内容の多様性を考えたとき、今回の受講生のフィード・バックの考察を通して、「教員が受講生の生活や興味を知り、それを ESL のコンテンツ{内容}に結び付けていく」ことが、これからのコンテンツ・ベースの ESL 授業において、受講生、教員の双方に利益があることと考える。

引用・参考文献

- 1) Atkinson, D. (2000). "TEOSL and Culture." *Tesol Quarterly*, 33. 625-654.
- 2) Caiger, J. et al.(1994). *Perceiving Education: Australian-Asian Perceptions Project Working Paper No.7*. Sydney: Academy of Social Sciences in Australia the University of New South Wales.
- 3) Day, R. & Yamanaka, J. (1996). *Impact Issues*. Hong Kong: Longman.
- 4) Dyer, B. (1998). "Reflective Teaching Practice in Cross-cultural Contexts: Teaching Women's Studies in Japan." *Women's Studies Quarterly*, no.3-4:153-166.
- 5) Fraire, P. (1972). *Pedagogy of the Oppressed*. New York: Penguin Books.
- 6) 婦人教育会館女性学・ジェンダー研究会編『女性学教育/学習ハンドブック』1997. 有斐閣.
- 7) ウヴェ・フリック、『質手研究入門』小田博、山本則子、春日常、宮地久子(訳)、2004. 春秋社.
- 8) Gee, J. P. (1992). *The Social Mind*. New York: Bergin & Garvey.
- 9) hooks, b.(1994). *Teaching to Transgress: Education as the Practice of Freedom* New York: Routledge.
- 10) Martin, J.N. & Nakayama, T.K.(2000). *Intercultural Communication in Contexts*. Mountain View, CA: Mayfield Publishing Company.
- 11) O'Maggio, A. C. (1986). *Teaching Language in Context*. Boston, MA: Heinle and Heinle.
- 12) 近藤 博 「大学におけるジェンダー教育実践の課題」2003. 『立教ジェンダー・フォーラム』第4号.
- 13) Shaules, J., Tsujioka, H., & Iida, M.(2003). *Identity*, Oxford: Oxford University Press.
- 14) Spack, R.(1997b). The Rhetorical Construction of Multilingual Students. *Tesol Quarterly*,31, 765-774.
- 15) Strauss, C. & Quinn, N. (1997). *A Cognitive Theory of Cultural Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 16) Tseng, H. (2002). "A Lesson in Culture." *ELT Journal* vol.56/1. January. 11-21. Oxford: Oxford University Press.
- 17) Weiler, K. (1992). "Teaching, Feminism, and Social Change." In Hulbert, C.M. and Totten, S. eds., *Social Issues in the English Classroom*, Illinois: NCTE.
- 18) Woods, J. (2002). *Gendered Lives*. Belmont, CA: Wadsworth.
- 19) Woods, J. (2000). "Gender, Communication, and Culture." In Samovar, L. & Porter, R. E.

(2000). *Intercultural Communication -- A Reader*. Belmont, CA: Wadsworth. 170-179.

英文文献の引用は、著者が翻訳させていただいた。

Appendix 1. 《英語發表準備用資料》

Gender, Culture, and Communication

Mid-term Presentation Outline

Group _____

Presentation title:

1. Introduction

2. Body 1

3. Body 2

4. Body 3

5. Conclusion

Materials:

(Names, authors, years, and/or internet site address)

Appendix 2 《発表評価の説明と基準》

About Presentation Time: 10 to 11 minutes.

Things you should keep in mind:

- You can prepare any materials you want for your presentation (e.g. visual or audio effects, handouts, etc.), but your primary task is making a speech. Use visual effects, etc. as a way to make your presentation clear or interesting.
- DO NOT READ! You can prepare an outline for your presentation though.

Evaluation:

Gender, Culture, and Communication

Instructor: Miyuki Iida

Presentation Evaluation Criteria

Date _____

Presenter _____

Total score : _____/50points

Presentation title _____

	lowest			highest	
1) Presentation Manner					
Voice 大きさ、スピード	1	2	3	4	5
Posture 立ち方、ジェスチャーなど	1	2	3	4	5
Eye-contact	1	2	3	4	5
Consideration to the class クラスに対する配慮	1	2	3	4	5
2) Structure and Content					
Structure of presentation					
構成はできているか	1	2	3	4	5
Statement of main topics					
主題、意見は述べられているか	1	2	3	4	5
Reasoning	1	2	3	4	5
順序だて、理由付けはできているか					
Preparation	1	2	3	4	5
準備はできているか					
1) Material					
Quality of the visual effects					
そのものの質	1	2	3	4	5
Presentation of visual effects					
効果的に使われているか	1	2	3	4	5

Comments: